

ひまわり

令和7年4月号



↑カラー版はこちらから

『やさしさ』

校長 門脇 伸也

令和7年度が始まりました。新一年生は小学部3名、中学部2名を迎えて、通学の児童・生徒は計36名、訪問学級の児童・生徒は小学部6名、中学部1名の計7名、合わせて43名（4月1日現在）となります。本校の教職員数は、様々な「職」の方で構成されているため60名を超えております。紙面に掲載されている転入の教職員の氏名はご覧いただき、皆様の来校時に顔と名前を照らし合わせていただければ幸いです。

さて、今回は校歌に少し触れてみます。この歌が誕生したのは1967（昭和42）年3月28日で、初めは「ひまわりの歌」という学級歌でした。本校の前身である新宿区立鶴巻小学校に「ひまわり学級」が開級してから、およそ6年4か月が経た時期で、やなせたかしさんが48歳の時です。この後、1988（昭和63）年11月26日に举行された新宿養護学校の開校10周年の式典で「ひまわりの歌」を本校の校歌として制定しました。

やなせたかしさんのどんな心情の中で、「ひまわりの歌」が出来たのだろうと想像すると、NHK朝の連続テレビ小説「あんぱん」の視聴者としては進行が楽しみにになります。もちろん勤務時間には視聴することは出来ませんので、1週間分まとめて録画で視聴しています。今回のこの朝ドラは、やなせたかしさん・暢（のぶ）さん夫婦をモデルにして作られたものだと言われています。

また、やなせさんは、「ひまわりの歌」を作ったこの年に『やさしいライオン』という作品を執筆しています。元々は文化放送のラジオドラマのために作られたらしいのですが、この作品について出版社の内容紹介では、「みなしごライオンの育ての親はやさしい犬。人間の都合で離れ離れにされても、消えることがなかった強いきずなを描きます。」とありました。

世間で流れている時事のニュースからは、「やさしい」とか「やさしさ」とは、ほど遠いものがたくさんあります。改めて、この「やさしい」の語句に含まれる意味を、私たち大人がしっかりと捉えて子どもたちへ伝えることが必要なのではと感じています。

本校の入学式では、初めに校長（私）から一人一人の新入生へ「ひまわりの花」の入った花束を手渡していきます。ひまわりの花に込める思いがあります。今年度は校長式辞において次のような言葉をいれました。

「先ほど、一人一人へ花束を手渡しました。この花束の中にひまわりの花を入れておきました。この学校で大切にしている花です。この学校には歌があつて、校歌と言いますが、この歌の中に、ひまわりの花のことが、たくさん出てきます。式の中で、この校歌を歌いますので、しっかり聞いてください。ひまわりの花は、花が小さな時、小さいから子どもの花の時、朝から夕方までお日様の光を浴びたくて、お日様を追いかけ、動きながらぐんぐんと育ちます。ひまわりの花のように、新入生の皆さんも、学校生活の中でぐんぐんと育ちます。明日から、お友達と楽しく、たくさんのことを学ぶ学校生活を始めましょう。」

大きく開いたひまわりの花を大人の花とすると、大人の花は一定の方向を向いたままになります。

ところで、本校は、現在の西新宿四丁目の地を新校舎として移転してきたのは、1996（平成8）年です。当初から地域の方々に理解される学校でありたいとの思いから、本校の児童・生徒の下校後は近隣の子どもたちが遊べる公園として、塀をつくらず四季の花や実のなる木々や花を植え、当初は滑り台やブランコといった遊具もありました。また、地域との交流と十二社の祭礼と合わせて、学校行事に「交流の日」を位置付けていました。しかし、次第に地域に住む方々も人が入れ替わり、世代も変わり、コロナ禍を通じて、この「交流の日」の在り方も改めて作り直すため、地域代表の方々と一緒に「交流の日」作成委員会を立ち上げています。

令和7年度、私共はやなせたかしさんのからにじみ出る「やさしさ」を地域の皆様と一緒に考えながら、本校の教育活動の充実に力を注いでいきたいと思います。本校に関係する皆様方、改めて本年度もよろしくお願いいたします。